常照
第８６８号

私たちは本当に幸せに向かっているのでしょうか？　キーワード　お釈迦様

現代日本を生きる私たちの多くは、かつての不便で貧しい時代からは想像もつかないような生活をしています。好きなものを食べ、着たい衣服を着、便利で快適な住環境に暮らし、交通手段・医療・福祉・教育などすべてにわたって、お金があれば私たちの欲求を満たすあらゆるサービスを受けることができると、そしてそういう欲求が満たされれば幸せになれるはずと進んできました。その結果、本当に幸せの手応えがあるのでしょうか。

今からおよそ二千五百年前、インドの北方に釈迦（シャカ）族と呼ばれる人たちがいました。その王族の家に男の子が生まれ、ゴータマ・シッダールタと名づけられて、大切に何不自由なく育てられました。父王は彼に最高級の絹織物を着せ、最上の食事を与え、それぞれの季節に応じた宮殿を建てて、困ったり苦しんだりしない生活をさせようと手を尽くしました。財力・権力で手に入れられるものなら何でも得られるようにし、我慢することも待つこともしなくていいように整えたのです。専属の学者があらゆる教養を授け、武道の達人がさまざまな術を教えました。宮殿では歌や踊りで彼を楽しませようと、毎日趣向を凝（こ）らした娯楽がありました。それは現代を生きている私たちが、こんな生活ができればいいなと願っているほぼすべてがすでに満

たされた生活でありました。

しかし彼は、時に弱い生き物が強いものに食べられてしまう光景を目にし、強大な隣国が攻めてきたらひとたまりもない自国のあり様と重ね合わせて、恵まれた境遇を心から喜ぶことも満足することもできませんでした。いつひっくり返されるかわからない束の間の贅沢は、かりそめのものであり、そこに絶対的な安心は感じられません。それは不安を誤魔化(ごまか)し、目を逸(そ)らすことでしかないと気づいたのです。

またある時には、老人の衰(おとろ)えた姿に出会い、治る見込みのない病人と遭遇し、二度と生を楽しめぬ死者の葬列を目の当たりにします。彼はそこで、自分が手にしている財力や権力がいかほどであろうとも、自らの学識・教養や技能のレベルがいかに高くとも、そうゆうものによっては人間の根本的な苦悩は解けないことに気づきました。

そこで彼は、どんな状況の下でも安心して生き、また死をも受け入れていける、確かな生きる根拠・根源的な安心を得るための真実を求めて、それまでのすべてを捨てて家を出ていく決心をします。

後にブッダ(真実を見抜いた方)となるゴータマが捨て去ったものを、私たちは今も、追い求めているのですね。

どうして人生を苦しいと感じるのでしょう

キーワード　喜捨(きしゃ)

仏教は、お釈迦様から始まります。「お釈迦様」と一般的に呼んでいますが、正しくは「釈迦牟尼世尊(しゃかむにせそん)釈尊(しゃくそん)」といいます。シャカ族出身の牟尼(心が静かになった方＝聖者)で世にも尊い方という意味です。ほかにも「ゴータマ・ブッダ」とか「釈迦如来(釈迦仏)」という名で

知られています。「お釈迦様」や「釈迦如来」と聞くと、「この世界を創造した超越的存在」というイメージを持つ人もいるかもしれませんが、そうではありません。また、祈祷(きとう)や布施(ふせ)によって特定の人間に恩恵を与えたり、罪を犯した人間に罰を与えたりするような方でもありません。人間と世の中の本質を見抜かれ、私たち人間がなぜ苦しんだり争ったりするのかを見極められた方なのです。

前章でもふれましたが、お釈迦様は釈迦族の王子として生まれ、贅沢の限りを尽くす生活の中で、人間の根源的な苦は財力や権力では解決できないことに気づかれました。根源的な苦とは、不如意（ふにょい）、つまり老・病・死や望まない出会いや別れなど、思い通りにならないことです。それでお釈迦様は出家し、ある先生の下で学び修行されました。その先生は「無所有処定(むしょうしょじょう)人間の所有欲、つまりモノにしがみつく心が苦の原因であると見抜く瞑想（めいそう）」ということを教えました。少し説明してみます。モノや貨幣や地位や他者などを、自分の都合のいいように自分のものとして使い、しがみついて離さないのが人間です。そして、みんながそれぞれに自分の都合のいいようにしようとすることで、競争や争いや他者否定や格差などが起こります。結果、ストレスは増し、そのことに振り回され、たとえ所有できても不安も不満も解消されず、さらに欲に振り回されて苦しむことになります。自分中心にどこまでも欲しがる心は満足も感謝も知りません。手に入れても喜びは一瞬で、次はもっといいものが欲しくなるのですね。

のちにお釈迦様は「知足(ちそく)(足るを知る)は第一の富である」とおっしゃいました。満足して感謝する人、

つまり「ありがとう」をいう人が豊かな人であるということです。私だけが都合よく手に入れたいという心が、実は自分も他人も苦しめていたのです。そして、自分のわがままを満たすために「神様、仏様」と拝むのは、神仏さえも自分の都合のために利用しようとすることで、結局そういう求め方は、しばらくすると「こんなはずではなかった」ということになっていきます。仏教では「喜捨（きしゃ）」といって、他者に貢献することが喜びになる世界が教えられているのです。「自分のために」は大切ですが、私たちは他者との関係がよくならなければ、自分も満足を得ることができないのですね。

「仏教のぶっ」真城義麿著より

発行所
〒047-0017
小樽市若松一丁目四番十七号
本願寺小樽別院
電話（〇一三四）二二一〇七四四番
FAX（〇一三四）二二九一四〇八〇番
テレホン法話　二二七一一六一六番

●令和8年4月8日（水）

花まつり　～釈尊降誕会～

本願寺小樽別院
午後2時30分　開場
3時　釈尊降誕会大法要
3時30分　記念講演
豊来家大治朗氏・露の五九洛氏

●令和8年5月15日（金）

子ども花まつり

小樽市民会館
午後1時開場　1時30分開演　入場無料
第1部　かんぶつ法要　第2部　マジシャン アッキー